

# 祝吉第 3 遺跡(第 2 次調査)

- 分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2015 年 3 月

宮崎県都城市教育委員会

## 目 次

### 本文目次

#### 序文・例言・目次

第1章 序	1	(4) 土坑 (SC) .....	16
第1節 調査に至る経緯 .....	1	(5) ピット及びピット内出土遺物 .....	17
第2節 調査の組織 .....	1	2 中世の遺物 .....	18
第2章 遺跡の位置と環境	2	(1) 陶磁器 .....	18
第1節 地理的環境 .....	2	(2) 須恵器 .....	19
第2節 歴史的環境 .....	2	(3) 土師器 .....	19
第3章 調査の成果	6	(4) 鉄製品 .....	21
第1節 発掘調査の方法と概要 .....	6	(5) 石製品 .....	21
第2節 祝吉第3遺跡の基本土層 .....	7	(6) 銭貨 .....	21
第3節 中世の遺構と遺物 .....	9	第4節 近世の遺物・時期不明の遺物 .....	21
1 中世の遺構 .....	9	出土遺物観察表 .....	22
(1) 据立柱建物跡 (SB) .....	9	第4章 総括 .....	23
(2) 溝状遺構 (SD) .....	14	写真図版 .....	27
(3) 焼土遺構 (SJ) .....	16	遺跡抄録 .....	33

### 挿図目次

第1図 遺跡位置図 .....	3	第11図 SD1出土遺物 .....	15
第2図 祝吉第3遺跡と周辺の調査地点 .....	4	第12図 SJ1実測図 .....	16
第3図 祝吉第3遺跡(第2次調査)確認調査・立会・本調査 トレンチ配置図 .....	5	第13図 土坑実測図 .....	17
第4図 祝吉第3遺跡遺構配置図 .....	6	第14図 SC2出土遺物 .....	17
第5図 調査区東壁土層断面図 .....	8	第15図 ピット内遺物出土状況及び出土遺物 .....	18
第6図 SB1・SB5・SB3実測図 .....	10	第16図 中世の遺物(陶磁器・須恵器・土師器) .....	20
第7図 SB2・SB4実測図 .....	12	第17図 中世の遺物(鉄製品・石製品・銭貨) 近世の遺物 時期不明の遺物 .....	21
第8図 SB6・SB7・SB8・SB9・SB10実測図 .....	13	第18図 祝吉第3遺跡(第1次調査) 遺構配置図 .....	25
第9図 据立柱建物跡出土遺物 .....	14	第19図 祝吉第3遺跡(第1次調査) 出土遺物 .....	26
第10図 SD1実測図 .....	15		

### 挿表目次

第1表 陶磁器観察表 .....	22	第3表 鉄製品・石製品・土製品観察表 .....	22
第2表 土師器観察表 .....	22		

### 図版目次

写真図版 1 .....	27	写真図版 4 .....	30
写真図版 2 .....	28	写真図版 5 .....	31
写真図版 3 .....	29	写真図版 6 .....	32

## 第1章 序

### 第1節 調査に至る経緯

平成 25 年 5 月 24 日、都城市文化財課に対して平和総合技研より都城市郡元町 3425 番における文化財所在の有無について照会がなされた。これによると工事計画は分譲住宅建設で、対象地點は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「祝吉第 3 遺跡（遺跡番号：M4010）」内に位置していたため、都城市文化財課は事前の確認調査を平成 25 年 6 月 4 日に実施した。現地における確認調査は対象地全体に計 6ヶ所のトレンチを設定して実施した。この結果、すべてのトレンチから表土下の黒褐色土より中世の土師器、陶磁器が出土し、複数のトレンチから土坑や掘立柱建物跡の柱穴と思われるビットが検出されたことから、当該期の集落遺跡が残存していることが明らかとなった。上記の結果を受けて、文化財課は事業者と協議を重ねた。この結果、分譲住宅の取付道路となる地点については工事基礎工によって破壊を免れることから、この範囲（214m<sup>2</sup>）については記録保存のための本発掘調査を実施、これ以外の範囲（住宅建設予定地）については、合併浄化槽設置工事の際に文化財職員による工事立会を実施することで合意した。

平成 25 年 7 月 8 日には、開発主体者である有限会社さくら不動産より文化財保護法 93 条第 1 項に基づく発掘届出が提出された。この後、同社と都城市は平成 25 年 9 月 26 日に「祝吉第 3 遺跡における埋蔵文化財の取り扱い等に関する協定書」を取り交わし、協定を締結した。これにより、都城市が埋蔵文化財発掘調査を受託し、契約締結後に速やかに発掘調査に着手することが決められ、発掘調査及び報告書作成に係る費用は有限会社さくら不動産が負担することも併せて取り決められた。

現地での発掘調査は平成 25 年 10 月 10 日から着手した。調査期間中は天候にも恵まれ、スケジュールが滞ることもなく、平成 25 年 11 月 11 日に終了した（実調査日数 17 日）。調査終了後は速やかに現場を撤収し、その後、平成 25 年度中は現場実測図の整理および出土遺物の整理作業を実施した。

翌平成 26 年度に入り、改めて報告書作成事業について業務委託契約を締結し、報告書作成作業を実施した。まずは、出土遺物の選別を行ない、報告書掲載遺物のピックアップを行なった。その後、遺物の実測作業を行ない、この作業と並行しながら遺構の製図作業も実施した。遺構の製図はトレースソフトを使用し、デジタルトレースによって行なった。また、遺物の製図はロットリングを使用し、紙トレースを行なった。

併せて、平成 26 年度は住宅建設に伴って工事立会を実施し、平成 27 年 1 月末時点で計 3ヶ所の確認が終っている。

祝吉第 3 遺跡では、平成 6 年に都城市教育委員会が今回調査地点の北側隣地を分譲住宅建設に伴って発掘調査を実施している。この時の調査でも中世を中心とした掘立柱建物、土坑が検出されたほか、それに伴って 13 ~ 14 世紀代を中心とした陶磁器、土師器が出土している。

このほか、今回の調査区のすぐ西に位置する県指定史跡祝吉御所跡をはじめとして、この地域では各種開発に伴って事前の確認調査を実施している。祝吉御所跡の確認調査では、対象地内に 10ヶ所のトレンチを設けて調査している。この結果、いくつかのトレンチからは掘立柱建物跡の柱穴と思われるビット、土坑、底面に硬化面を伴う道路状構造等が検出されている。また、ここでも 13 ~ 14 世紀代の土師器、陶磁器が出土している。このような結果を総合すると、当地域周辺には中世を中心とした集落遺跡が残っていることが明らかとなり、加えて、今回の調査地点よりもさらに北側に向かって遺跡に広がりがあることがわかりつつある。

よって、ここでは平成 6 年度に実施した調査を「第 1 次調査」として取り扱い、今回実施した調査を「第 2 次調査」として取り扱うこととする。

### 第2節 調査の組織

#### 平成 25 年度 確認調査・本発掘調査

・調査主体者	宮崎県都城市教育委員会
・調査事務局	教 育 長 酒匂 醍以
	教 育 部 長 池田 文明
	文 化 財 課 長 新宮 高弘
	文 化 財 課 副 課 長 松下 述之
	文 化 財 課 主 幹 栗畑 光博

・調査担当 文化財課主査 加賀 淳一  
同 嘱託 早瀬 航

#### 平成26年度 報告書作成

・調査主体者 宮崎県都城市教育委員会  
・調査事務局 教育長 黒木 哲徳  
教 育 部 長 児玉 貞雄  
文 化 財 課 長 新宮 高弘  
文化財課副課長 松下 述之  
文化財課主幹 菊畑 光博  
・報告書作成担当 文化財課主査 加賀 淳一

#### 発掘作業従事者

大盛祐子 原田 貢 上西政実 木上 保 中原忠珍 津曲節子 小山田福子 吉盛五恵子 塩屋貴士  
下津佐ミエ子 抜追清美

#### 整理作業従事者

園田孝子 山下美香 新徳より子 尾曲真貴 水光弘子 免田友香理

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境（第1図）

祝吉第3遺跡の所在する都城市郡元町は都城市的中心部に位置している。都域盆地は盆地の中央を北流する大淀川を境として西に扇状地地形、東にはシラス台地地形が発達するという地形特徴を持っている。祝吉第3遺跡はこの西側扇状地（一万城扇状地）の扇央部に位置している。扇状地の北には沖水川が西流しており、調査地点の西3.5kmの地点で大淀川本流と合流している。調査地点の南には旱水池がある。この旱水池は、扇状地の谷頭から湧き出た伏流水が滞水しているものである。旱水池を起点として西側には低湿地も広がっており、現在は水田となっている。こよりも一段高くなった地点に畑となっている地域が広がっており、現在は住宅地となっている。この他に戦後まもなくこの地域では大規模な耕作整理が行なわれており、調査地点の周辺はこれに伴って造成を受けたことも明らかとなっている。

今回調査した祝吉第3遺跡は、先述した扇状地のちょうど扇央部にあたる地点に位置している。旱水池との距離も近いことから、水場にも事欠かなかったことが推定される。調査地点の標高は約160m台で推移している。調査地点の現況は畑地である。

### 第2節 歴史的環境（第1図）

祝吉第3遺跡の周辺ではこれまでにも複数の発掘調査がなされており、都城市内でも遺跡の調査件数が多いエリアとなっている。ここでは、周辺遺跡の状況について時系列的に取上げながら概観してみたい。

現在までのところ、調査地点の周辺では旧石器時代にまで遡る遺跡は見つかっていない。様相が明らかとなるのは縄文時代からとなる。まず、調査区の西に位置する白山原遺跡では縄文時代早期の集石遺構のほか土器、石器等の遺物が多数出土している。このほか池島遺跡でも縄文時代早期の集石遺構が見つかっていることから、集落が営まれたものと考えられる。

弥生時代の調査事例は多く、この地域では比較的多くの弥生時代集落が見つかっている。池ノ友遺跡、池島遺跡では弥生時代中期の集落が見つかっているほか、牟田ノ上遺跡、祝吉遺跡では弥生時代後期～終末期にかけての集落も見つかっており、当該期の集落が展開していたこともわかっている。ただし、弥生時代前期に遡る遺跡はこの地域周辺では見つかっていない。

続く古墳時代の集落は調査地点周辺では見つかっていない。また、古墳、その他の墓も周辺では見つかっていないため、この地域における古墳時代の様相については不明瞭である。



1: 祝吉第3遺跡 2: 祝吉御所跡 3: 神水古墳 4: 池島遺跡 5: 池ノ友遺跡 6: 白山原遺跡 7: 半田ノ上遺跡 8: 天神原遺跡  
9: 久玉遺跡 10: 松原地区遺跡群 11: 祝吉遺跡

第1図 遺跡位置図 (S=1/10,000)

古代（奈良・平安時代）の集落遺跡も周辺での調査事例は少なく、様相は不明瞭であるが、今回の調査地よりも南西にある早水神社の参道沿いにある沖水古墳からは、軽石製の円筒形容器が見つかっており、その側から経筒、湖州鏡、玉が見つかっている。このことから、このマウンドは経塚である可能性が指摘されている。

このほか、池島遺跡、池ノ友遺跡では、平安時代末に造営されたとみられる周溝墓が検出され、同時に副葬品も見つかっている。池島遺跡からは当地域では希少な高麗青磁も出土している。このことから、この周辺では何らかの階層を持った人物が居住していた可能性もあり、今後周辺における集落遺跡の調査も注目される。

調査地点の西30mには、島津宗家初代惟宗忠久が文治元（1185）年に島津荘の惣地頭職に任じられ、鎌倉より下向し、御所（館）を構えたとされる祝吉御所跡がある。現在は宮崎県指定史跡として公園化されている。



第2図 祝吉第3遺跡と周辺の調査地点 S=1/2500

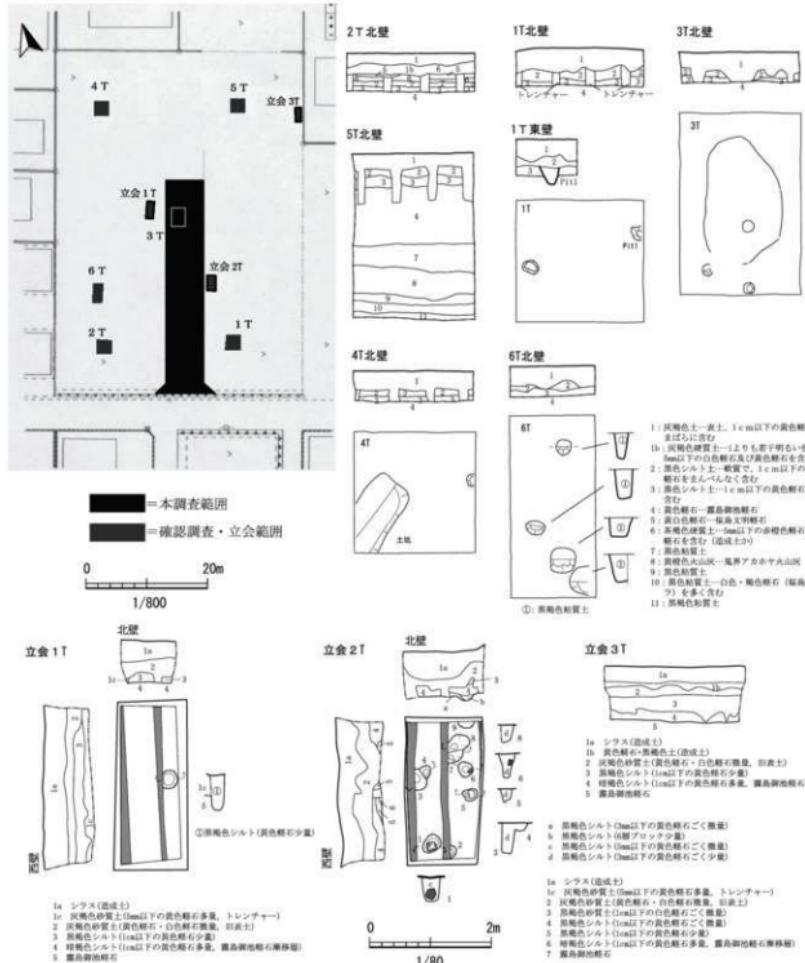
平成5年に当市教育委員会が確認調査を実施した結果、掘立柱建物跡の柱穴と思われる小穴や溝状遺構が見つかっているが、鎌倉時代の館跡を直接示すような遺構は見つかっていない。この時の出土遺物の時期は13～14世紀代を中心となっている。

このほか、周辺では中世の集落遺跡も見つかっており、先述した池島遺跡、牛田ノ上遺跡、天神原遺跡等がある。天神原遺跡では、掘立柱建物跡群が見つかっており、13世紀後半から15世紀前半にかけてピークのある集落であることがわかっている。このほか樺山・郡元地区遺跡、久玉遺跡等がある。松原地区遺跡群中の松原地区第一・三遺跡では13世紀後半に大溝を廻らす館跡が見つかっているほか、14世紀後半～15世紀前半の屋敷地が見つかっている。

近世の遺跡は、松原地区遺跡群と同様に区画整理事業に伴って広域が発掘調査された。久玉遺跡において見つかっている。昭和63年から平成12年にかけて12次にわたる発掘調査を実施しており、各調査区で近世の遺構、遺物が見つかっている。ここでは、溝に区画された集落が検出され、薩摩焼や肥前系の染付碗等が多数出土しており、当該期の一般集落の様相を示す事例となっている。

【引用・参考文献】

- 都城市教育委員会 1981 「祝吉遺跡」 都城市文化財調査報告書第1集  
都城市教育委員会 1982 「祝吉遺跡」 都城市文化財調査報告書第2集



### 第3章 調査の成果

#### 第1節 発掘調査の方法と概要（第3図）

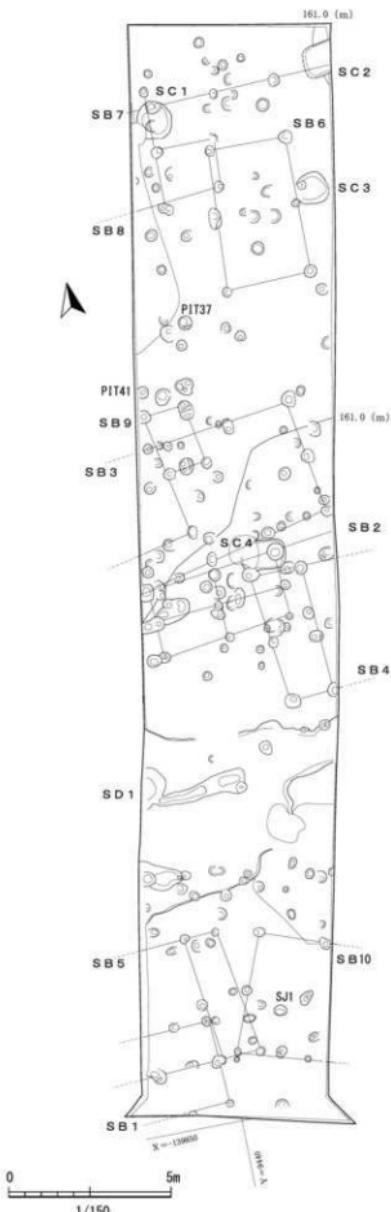
祝吉第3遺跡における今回の発掘調査は、分譲地の取付道路部分をトレントとして調査区を設定した。調査区が狭小であったこと等から、グリッドによる区割りは実施していない。ただし、遺構・遺物の測量には国土座標を用いるため、調査地点の近辺に設置されていた基準点をもとに座標移動を行ない、調査区のすぐ脇に測量用基準点を設置した。

調査はまず、重機によって表土剥ぎを実施し、遺物包含層であるⅡ層およびⅢ層を露出させた。この後、人力による掘下げへと移行した。調査区内には、ゴボウ植付によるトレントチャーチが南北方向全面に入っている。霧島御池鉛石層（V層）中まで達していた。そのため、遺物は搅乱されており、原位置を留めないものや小片となっているものが多かった。包含層掘下げに伴って出土した遺物は適宜写真撮影、実測図化等を行ない、トータルステーションを使用して取上げ、座標位置を記録した。これにより取上げた遺物は約200点で、指頭大以下の小片は一括にて取上げた。

包含層の掘下げが終了した後、Ⅳ層上面にて遺構検出を行なった。この結果、土坑4基、溝状遺構1条、焼土遺構1基のほか掘立柱建物跡の柱穴と思われるビットが約150基検出された（第4図）。

柱穴と思われるビットが多数検出されたことから、掘立柱建物跡の柱穴配列を検討したが、先述したように、トレントチャーチによって遺構が搅乱を受けている箇所も多く、検出平面から正確な配列を導き出すことは困難であった。そのため、これらの柱穴ビットは半裁し、埋土の特徴を記録した上で完掘した。その後、改めて掘立柱建物の配列を検討した結果、主軸方向の異なる2グループの掘立柱建物跡が検出され、柱穴掘方の状況等から複数回の建替えがなされた掘立柱建物跡があることも明らかとなった。調査の結果、調査区外へと延びているものも含めて合計10棟の掘立柱建物跡が検出された。

これら検出された遺構は、完掘した後に個別の遺構写真撮影を行なった。また、遺構の断面図も作成し、スケール1/20を基本とした平面図を作成した。一部の柱穴ビットの中には完形となった土器や建物の壁材として使用されたと思われる粘土塊が出土しており、これらの出土状況も実測図化した。これらの実測作業を経て、Ⅳ層上面のコンターラインを作成して調査は終了した。



第4図 祝吉第3遺跡遺構配置図 ( $S=1/150$ )

## 第2節 祝吉第3遺跡の基本土層（第5図）

今回調査を実施した祝吉第3遺跡の基本土層は、以下の通りとなる。

I層は、褐灰色（7.5YR4/1）砂質土である。表土で現在の畑耕作土である。層厚約30cmで調査区全面に堆積しており、ゴボウ植付のためのトレーンチャーが入っている。トレーンチャーは地表面から約1mに達しており、下層にある霧島御池軽石層（V層）中に達している。

II層は、黒色（7.5YR2/1）粘質シルトである。粘性があり、1cm以下の黄色バミスをまんべんなく含んでいる。本調査の中心時期となる中世の遺物包含層である。既に削除している地点もあり、調査区全面での堆積は確認されなかった。調査区南側の最も残存している場所で約20cmの堆積が認められた。通常、都城市内における台地上の遺跡では桜島文明軽石層下に見られる上層であるが、今回の調査地点では、同軽石層が欠落していることから、II層とともに削平されたものと考えられる。ただし、一部の遺構埋土上位には桜島文明軽石の堆積が確認されていることから、同層の降下があったことは確かである。今回の調査で検出された遺構埋土の大半はII層に対応するものである。

III層は、黒褐色（7.5YR3/2）粘質シルトである。1cm以下の黄色バミスを多く含んでいる。やや硬くしまっている。層厚は約20～30cmで堆積している。遺物包含層であるが、遺物は層の上位から出土しているのみである。

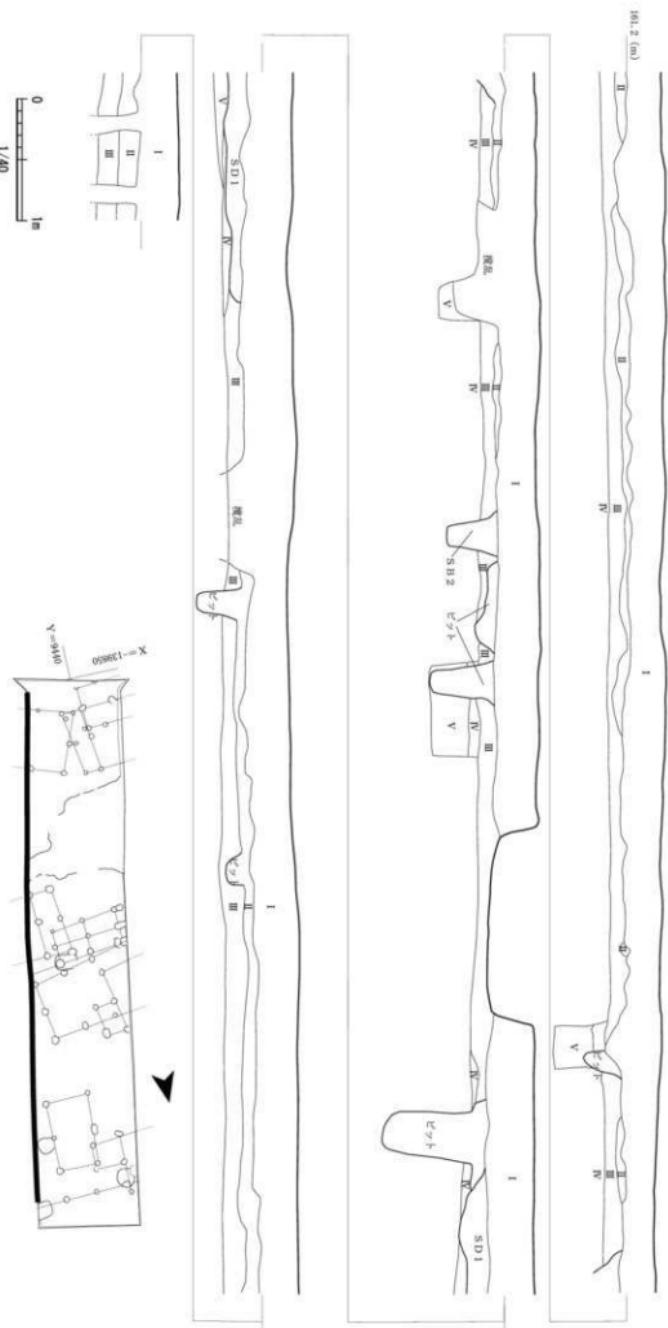
IV層は、黒褐色（7.5YR3/2）粘質シルトである。1cm以下の黄色バミスを非常に多く含んでいる。下層にある御池軽石層（V層）への漸移層である。層厚は約10～20cmで堆積している。本調査における遺構検出面である。

V層は、黄橙色（10YR8/6）軽石で、霧島御池軽石（kr-M）に該当する。確認調査を実施した際に層厚約12mの厚さで堆積していることが確認できた。

以上のような基本層序が調査区全域において確認できた。このような土層堆積状況やIV層上面におけるコンターラインの巡りをみると、調査区の中央付近がわずかながら高まりとなっていたこともわかる。このほか、調査区の西壁では、III層直上において桜島文明軽石の堆積が見られる地点もあった。これは本来堆積していたII層が人為的に削平を受けたものと考えられ、後述する掘立柱建物跡等の遺構群が構築される前に何らかの造成が行なわれた可能性があることを示している。

このことを裏付けるように、対象地の南西隅に設けた試掘2トレーンチでは、表土下に桜島文明軽石層が堆積していることが確認でき、その下層には造成土と思われる軽石混じりの硬質土の堆積が確認できた。さらに、その下位では基本土層II、III層がプライマリーな状態で堆積していたことから、削平した土をこの地点に流し、敷き均している可能性がある。

調査地点周辺では御池軽石層が約12mの厚さで堆積しており、間層の黒色粘質土を挟んで下位には鬼界アカホヤ火山灰層の堆積が確認できた。アカホヤ火山灰層は層厚約0.4mで堆積している。その直下には黒色粘質土が堆積しており、さらにその下位には黒色粘質土で白色・褐色軽石を多く含んでいる。さらにその下位にも黒褐色粘質土が堆積している。通常、当市内の遺跡において縄文時代早期に該当する層であるが、今回の調査区からは遺構・遺物ともに検出されなかった。



第5図 調査区東壁土層断面図 (S=1/40)

### 第3節 中世の遺構と遺物

祝吉第3遺跡で検出された中世に該当する遺構は、掘立柱建物跡10棟、溝状遺構1条、土坑4基、焼土遺構1基、小穴（ピット）約150基である。これらは調査区の全面で検出されており、調査区内で分布に偏りが見られることはなかった。

検出遺構それぞれの配置を見ると、まず、溝状遺構（SD1）が1条のみ調査区南で検出されている。この付近では掘立柱建物跡の柱穴と考えられるピットがあまり検出されておらず、これらとは明確に分離して構築されていることがわかる。また、調査区の中央部分では、掘立柱建物跡がまとまって検出され、なおかつ、柱穴と思われるピットも多数検出された。このことから、この場所を中心にして繰り返し建物が構築されたことがわかる。

検出された掘立柱建物跡は主軸方向から大きく2つのグループに分けることができる。ひとつはほぼ東西方向に主軸をもつもので、今回検出された掘立柱建物跡の大半がこの主軸方向に該当する。

もうひとつは、南北方向に主軸を持つもので、唯一、SB6のみがこの主軸方向に該当する。このほか、土坑は調査区の北側を中心に検出されており、合計4基検出された。

出土遺物についてみると、先述したように調査区内の遺物包含層は既に削除している箇所も多く、また、トレンチャによって擾乱を受けている箇所も多かった。そのため、出土遺物は小片となっているものが多く、原位置を留めていないものも多かった。遺物は土師器のほかに少量の国産陶磁器や貿易陶磁器が含まれていた。このほか、鉄製品、石製品、土製品、錢貨等が出土している。遺構内出土遺物には土師器のほか、陶磁器（国産陶磁器、貿易陶磁器）、粘土塊、炭化物、鉄製品が見られた。

第1次調査時には繩文土器、弥生土器のほか平安時代に該当する土師器もごく少量出土しており、調査地点周辺にはこの時期の遺跡が残っていることが明らかとなっている。今回の調査区からは繩文土器、弥生土器及び当該期の遺構は検出されておらず、この時期の遺跡範囲は今回の調査地点付近までには及んでいないものと考えられる。

#### 1 中世の遺構

##### （1）掘立柱建物跡（SB）

###### SB1 1号掘立柱建物跡（第6図）

調査区の南西隅で検出された掘立柱建物跡である。検出された限り、2間×（a）間となる。主軸は東西方向にあり、遺構の大半は調査区外へと延びている。柱穴の深さは検出面から最大で0.4mを測る。遺構埋土はいずれの柱穴も黒色粘質土をベースとしたものである。

SB1からは遺物は出土していない。

###### SB2 2号掘立柱建物跡（第7図・第9図）

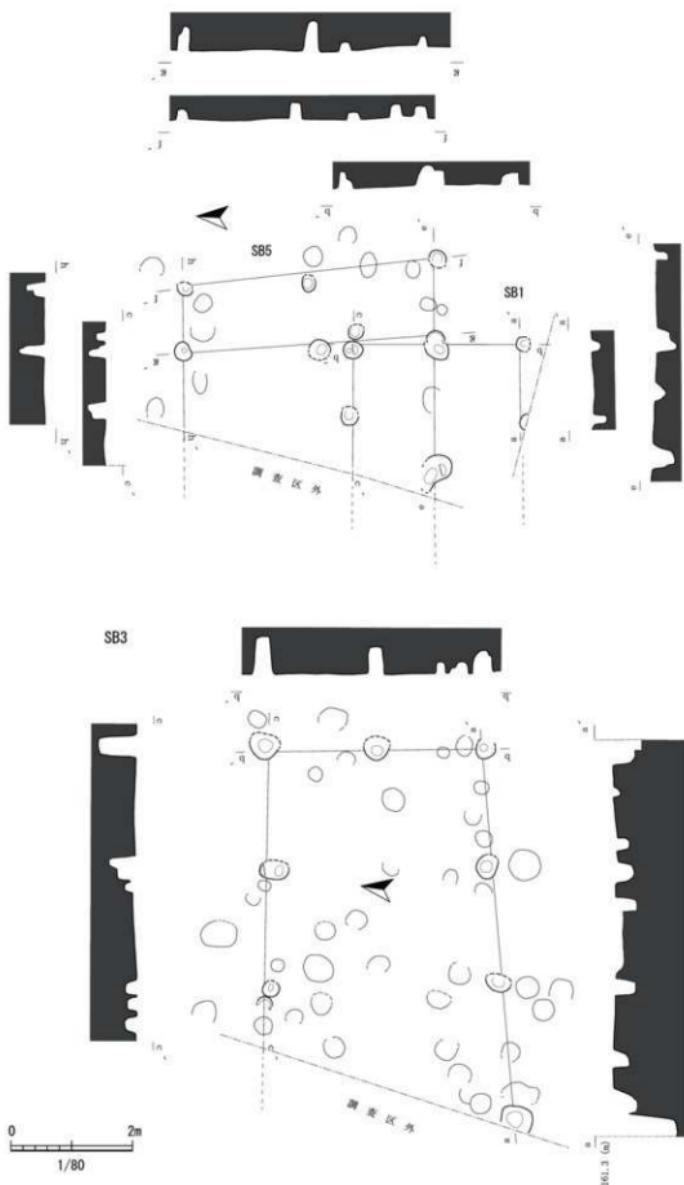
調査区中央で検出された。周囲には多数のピットが検出されており、調査区内で最も遺構密度の高い地点である。この掘立柱建物跡もすべて検出されていないが、検出された限り、3間の桁行を持ち、孫庇を持つ構造となる。主軸は東西方向にあり、遺構の一部が調査区外へと延びている。柱穴は平面の直径が最大で0.5cmを測る。柱穴の深さは検出面から最大で1.1cmを測り、検出された掘立柱建物の中では最も深い。底部の柱穴にはほぼ同じ位置で重複が見られることから、建替がなされたものと考えられる。庇部分の柱穴の深さをみると、孫庇の柱穴が比較的浅いようである。

SB2からは土師器のほか鉄釘が出土している。

1は土師器壺の底部である。底径は8.0cmである。底部の切り離しは糸切りによるものである。2は鉄釘である。錆痕によって詳細な形状は明らかではないが、折れ曲がっている。

###### SB3 3号掘立柱建物跡（第6図・第9図）

調査区の中央で検出された。2間×3(+a)間の平面規模を持つ掘立柱建物跡である。主軸は東西方向に持っている。すべての柱穴が検出されていないため、遺構プランは不明であるが、西側の桁行は調査区外へと延びている。このほか西側に庇を持つ可能性も残っている。桁行の柱間は約1.6m、梁行の柱間は約1.4mである。



第6図 SB1・SB5・SB3 実測図 ( $S=1/80$ )

柱穴の深さは検出面から最大で 1.1 m を測る。

SB3 からは土師器坏が出土している。

3 は土師器坏の底部である。小片のため底部の切り離しは不明である。

#### SB4 4号掘立柱建物跡（第7図・第9図）

調査区の中央付近で検出された。底部分が検出されたのみで、遺構の大半は東側の調査区外へと延びている。そのため、正確なプランは不明で身舎部分の面積も不明であるが、規模は大きはないようである。遺構の主軸は東西方向に認められる。柱穴の深さは検出面から最大で 0.7 m を測る。

SB4 の柱穴内からは青磁碗が出土している。4 は口縁部の破片である。口縁部は端反りとなり短く折り曲げられる。内外面ともに施釉が認められる。上田分類 D 類に該当するもので、14世紀代の範疇で捉えることができる。

#### SB5 5号掘立柱建物跡（第6図）

調査区の南西隅で検出された掘立柱建物跡である。遺構の主軸は東西方向にあり、プランの半分以上は西側の調査区外へと延びている。そのため、遺構の全形は不明であるが、検出された限り、2間 × (a) 間の底を持つ建物跡であることがわかる。柱穴の深さは検出面から最大で 0.5 m を測る。

SB5 からは遺物は出土していない。

#### SB6 6号掘立柱建物跡（第8図・第9図）

調査区の北で検出された、1間 × 2間の掘立柱建物跡である。遺構の主軸は南北方向にあり、他の掘立柱建物群とは異なっている。今回の調査では唯一全形の分かる掘立柱建物跡である。柱穴の深さは検出面から最大で 0.6 m を測る。検出された身舎の面積は 10.25m<sup>2</sup>を測る。柱間は 1.9 ~ 2.0 (m) ある。検出された掘立柱建物跡の中では最も小型の規模となっている。

SB6 からは土師器坏、小皿が出土している。5 は底部で切り離しは不明である。6 の底部の切り離しは糸切りである。7 は底部で底径は 6.0cm を測る。底部の切り離しは糸切りである。

#### SB7 7号掘立柱建物跡（第8図・第9図）

調査区の北端付近で検出された。桁行のみが検出された掘立柱建物跡である。検出された柱穴は 3 つである。軸線上には SC2 があり、この遺構と切り合い関係にあることも考えられるが、不明である。柱穴の深さは検出面から最大で 0.4 m を測る。

SB7 からは土師器が出土している。このほか鉄釘の小片も出土している。

8 は土師器小皿である。口径は 7.8cm、底径 6.0cm、器高 1.7cm を測る。底部の切り離しは糸切りである。

9 は鉄釘である。錆の付着が著しく、本来の形状は不明である。

#### SB8 8号掘立柱建物跡（第8図・第9図）

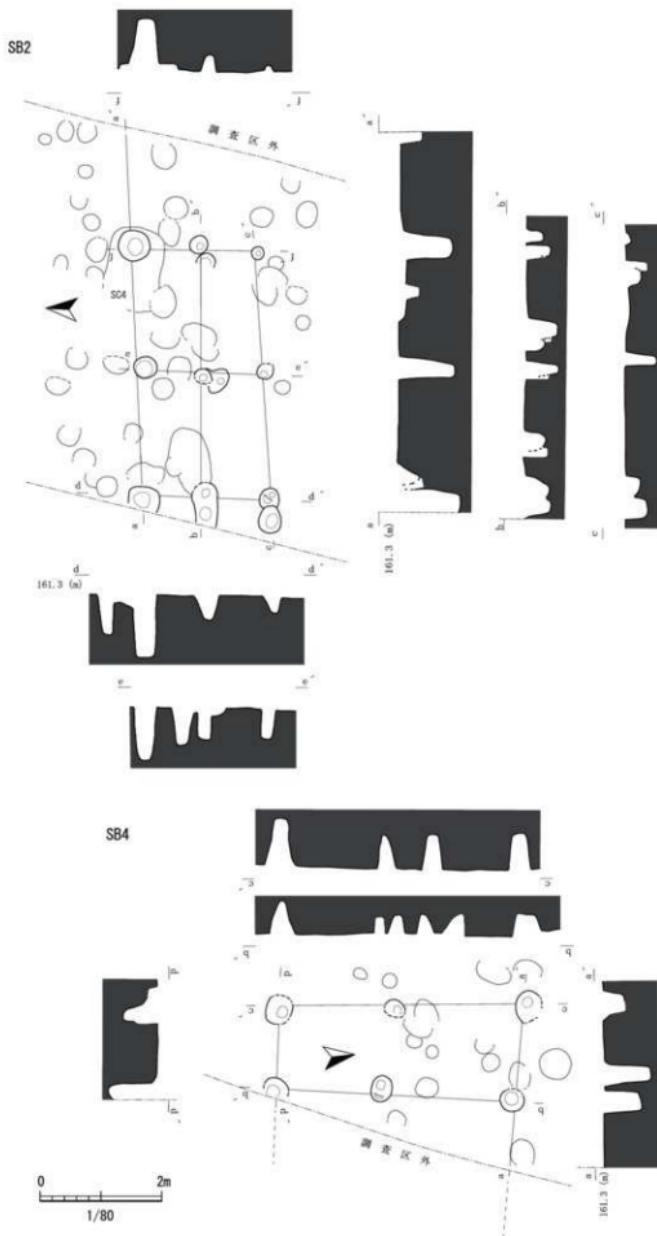
調査区の北西隅で検出された。この建物跡も部分的に検出されたのみである。プランは (2間 + a?) × (a) 間で 1 間分の突出部のような底を持っている。柱穴の深さは検出面から最大で 0.8 m を測る。

SB8 からは土師器の小片が出土している。10 は小皿である。底部から短く立ち上がる。口径は 7.6cm、底径 6.0cm、器高 1.1cm を測る。底部の切り離しは糸切りである。11 も小皿である。口径は 7.8cm、底径 6.0cm、器高 1.0cm を測る。底部の切り離しは糸切りである。これらは非常に似通っており、同一個体の可能性もある。

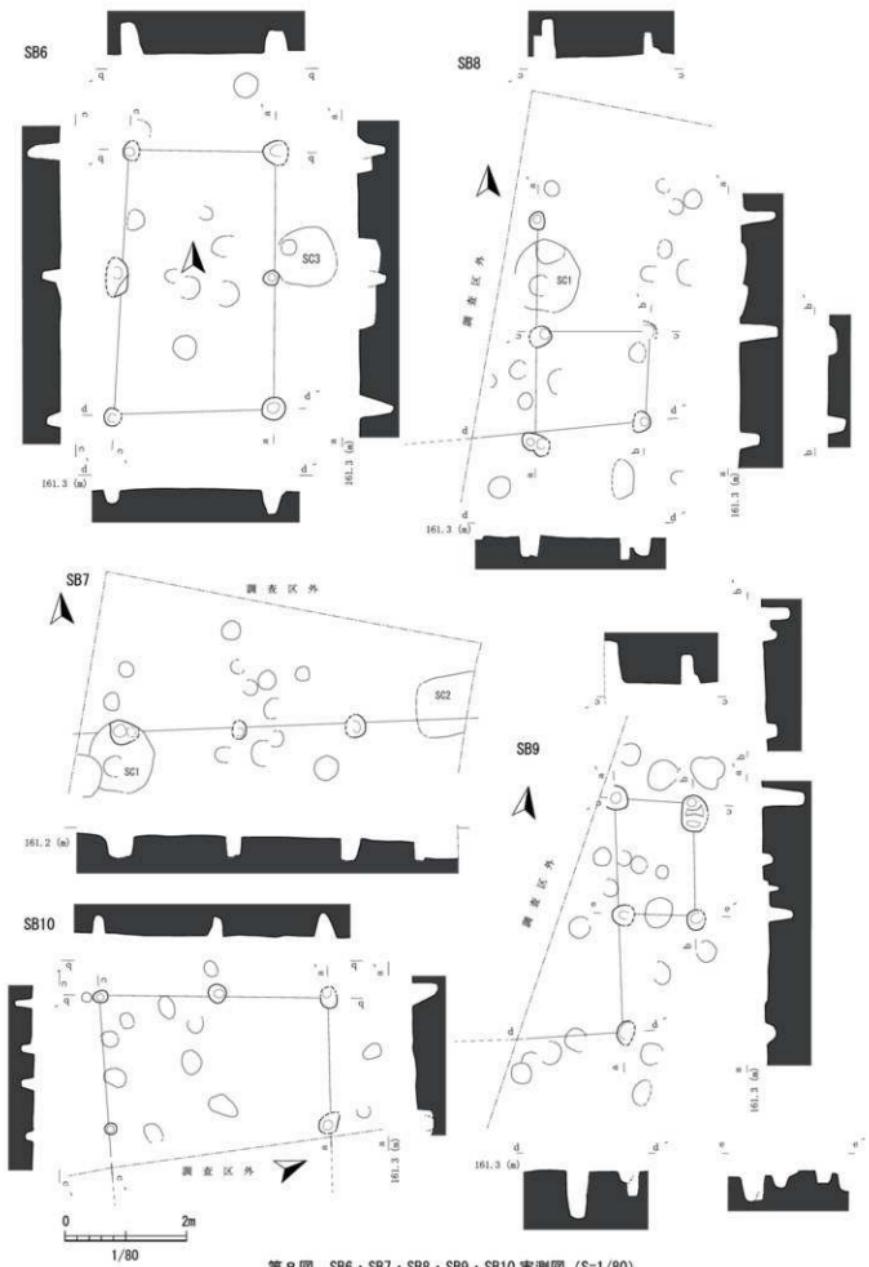
#### SB9 9号掘立柱建物跡（第8図）

調査区中央の西側で検出された。(2間) × (a) 間の底付掘立柱建物である。梁行は調査区外へも延びる可能性がある。主軸は東西に有る。柱穴の深さは検出面から最大で 0.4 m を測る。

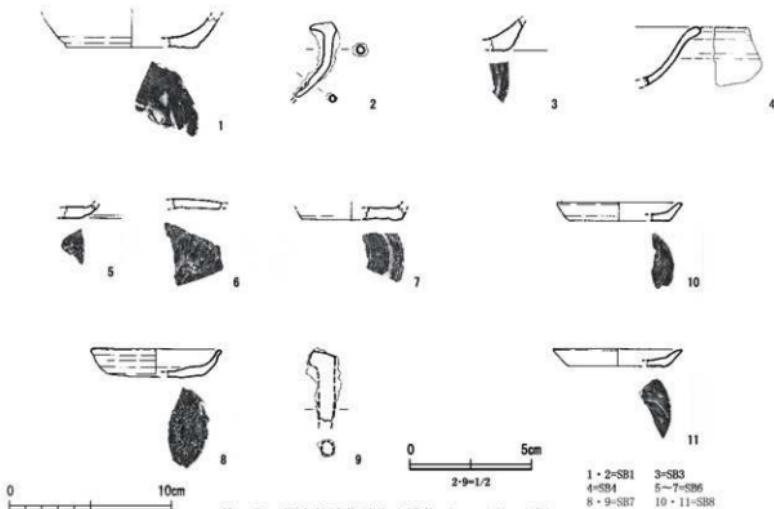
SB9 からは遺物は出土していない。



第7図 SB2・SB4実測図 ( $S=1/80$ )



第8図 SB6・SB7・SB8・SB9・SB10 実測図 (S=1/80)



第9図 堀立柱建物跡出土遺物 ( $S=1/3 \cdot 1/2$ )

### SB10 10号掘立柱建物跡（第8図）

調査区の南東隅で検出された。(2間) × (a)間の掘立柱建物跡である。東側に張り出すように突出部状に底が認められる。柱穴の深さは検出面から最大で0.6mを測る。

身舎内に焼土遺構SJ1があるが、直接的にこの遺構との同時性を示す状況は見られず、この遺構との関連は不明である。

SBJ1からは遺物は出土していない。

### (2) 溝状遺構 (SD)

#### SD1 (第10図・第11図)

調査区の南で検出された溝状遺構である。調査区を横断するように検出されたことから、東西方向に延びているものと推察される。遺構検出面はIV層である。不整な平面形を呈しており、調査区の西壁付近では掘り込みも検出された。また、遺構の中央部にもやや細長く延びる溝が検出されている。検出された溝幅は最大で5.8m、最小幅は0.7mを測る。

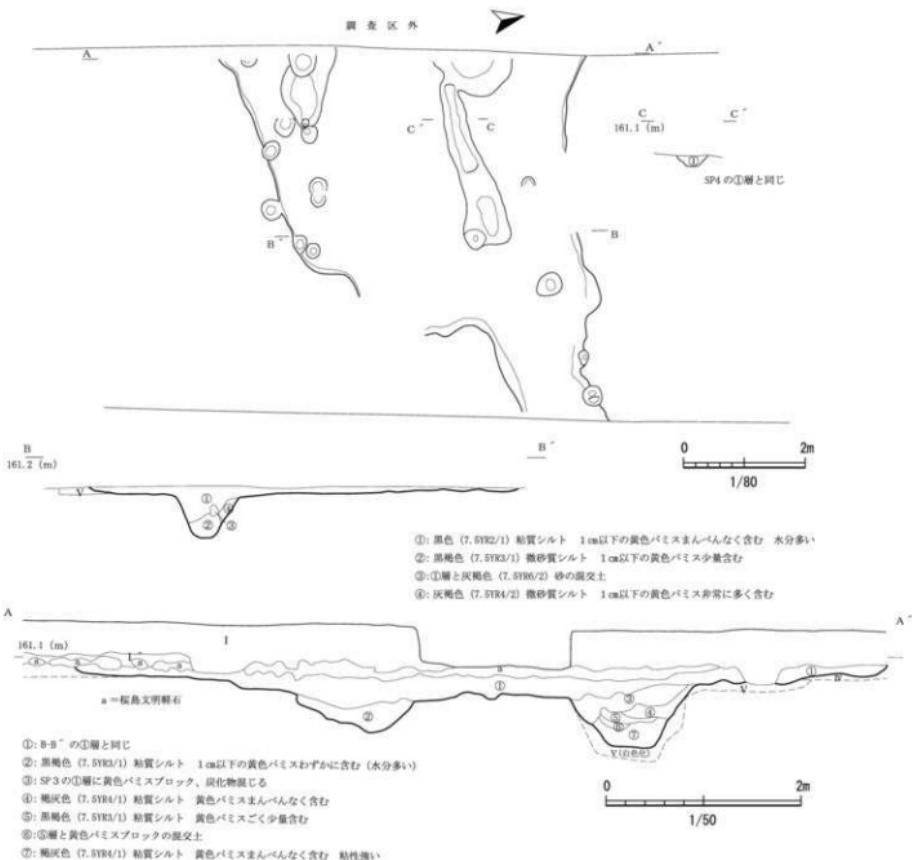
遺構は最深部が御池軽石層(V層)まで掘り込まれている。遺構の断面形は浅い箱形を呈しており、立ち上がりは緩やかになっている。基本的な深さは0.1~0.2mほどしかなく非常に浅いが、溝状に掘りこまれた部分の最深部の深さは0.9mを測る。遺構埋土は基本土層II層に対応する黒褐色粘質土が堆積しており、上位には桜島文明軽石が堆積していた。掘込み底面付近では地山の御池軽石が白色化している状況が確認でき、何らかの水成作用が影響しているものと考えられる。

SD1からの出土遺物は少なかった。遺物は土師器小片がほとんどである。このほか、実測不可な常滑焼の小片、土錐、鉄釘、粘土塊が出土している。

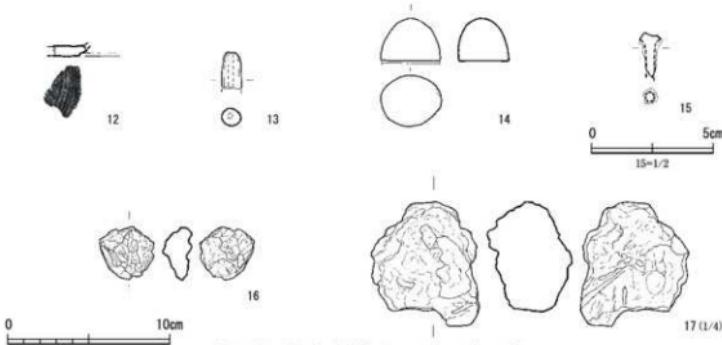
12は土師器壺の底部である。小片のため細かい形状は不明であるが、底部の切り離しは糸切りである。13は土錐である。半分は欠失している。胎土は土師器に見られるものと色調等変わりない。

14は円碟の二次転用品で、破断面を使用面として砥石として使用している。15は鉄釘である。半分ほど欠失しており、錆化も著しい。

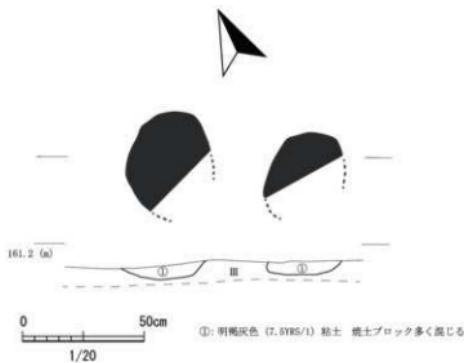
16・17は粘土塊である。スサ状のものが入っていた痕も残っており、何らかの建築部材の一部と考えられる。



第10図 SD1 実測図 (S=1/80 断面図 S=1/50)



第11図 SD1 出土遺物 (S=1/3・1/2・1/4)



第12図 SJ1 実測図 (S=1/20)

### (3) 焼土遺構 (SJ)

#### SJ1 (第12図)

調査区の南で検出された。直径約0.5mの範囲で灰や炭化物を伴う焼土が検出されたため、何らかの遺構としての可能性を考え、周辺を精査した。焼土はトレンチャーによって切られていたものの、掘り込み等は見られず、単純に堆積しているのみと考えられた。遺構中の焼土灰の中には、炭化物のほか土器器の小片も含まれていた。SB10の身合内にあることから、これに付随する遺構である可能性も考えられるが不明である。

出土した土器器の小片は実測不可である。形状は不明であるが、他の遺構、包含層から出土しているものと胎土の特徴が相似している。

### (4) 土坑 (SC)

#### SC1 (第13図)

調査区の北西隅で検出された円形の土坑である。直径は約1.1(m)である。遺構の北端はSB7の柱穴と切り合っているが、先後関係は不明である。遺構の断面形は浅い箱形を呈しているものと思われ、深さは約0.2mである。遺構埋土は黒色粘質土でII層に対応する。遺構の中央でピットとの切り合いが認められるものの、埋土に違いは見られず、先後関係は判然としない。

SC1から遺物は出土していない。

#### SC2 (第13図・第14図)

調査区の北東隅で検出された略方形を呈すると思われる土坑である。遺構の半分は調査区外へと延びている。遺構の西端はトレンチャーによって搅乱を受けている。遺構の平面形は $0.9 \times (0.9 + a)$ mである。遺構の断面形は箱形を呈している。深さは検出面から最大で0.5mを測り、御池軽石層(V層)にまで到達している。埋土は黒色粘質土を基本としており、下層ほど黄色軽石を多く含んでいる。

遺物は埋土上層から常滑焼が出土している。

18は常滑焼窯の胴部である。外面には押印文が認められる。胴部のみで他の部位の形状が不明なことから、遺物の詳細な時期は不明である。

#### SC3 (第13図)

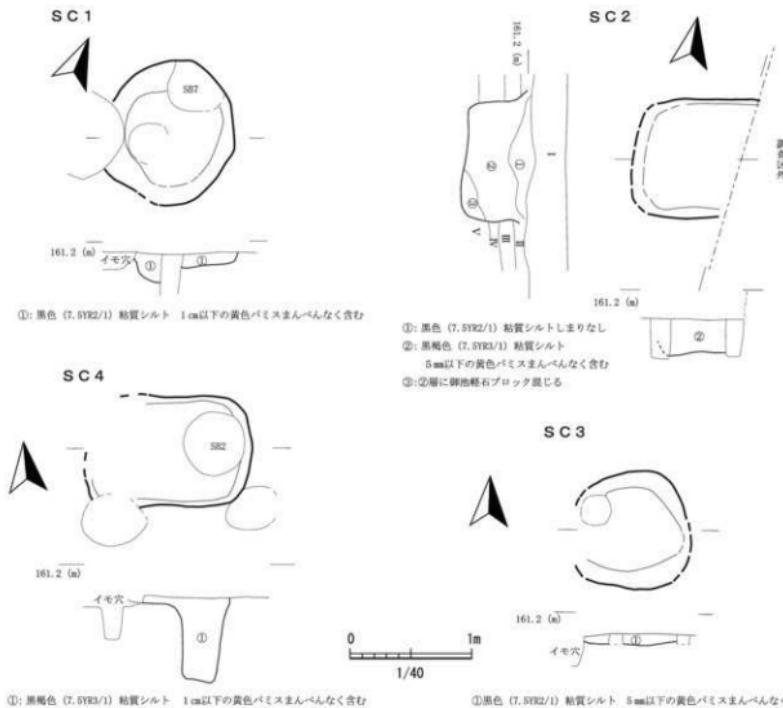
調査区の北東で検出された墳円形の土坑である。トレンチャーによって削失している箇所も多いが、平面の直径は約1.0mを測る。遺構断面形は浅い箱形を呈しているものと考えられ、遺構の深さは約0.1mと非常に浅い。埋土は黒色粘質土が堆積しているのみである。

SC3からは遺物は出土していない。

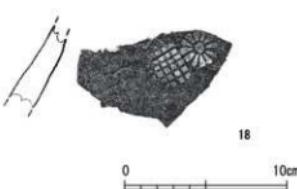
#### SC4 (第13図)

調査区の中央で検出された略方形を呈すると思われる土坑である。トレンチャー及びイモ穴によって搅乱を受けているが、平面形は $0.9 \times 1.4$ mを測る。遺構自体はSB2の柱穴と切り合っているが、埋土はほぼ同一であり、土層断面の観察からは先後関係を見出すことはできなかった。遺構の断面形は浅い箱形を呈しているものと思われ、深さは約0.1mと非常に浅い。

SC4からは遺物は出土していない。



第13図 土坑実測図 (S=1/40)



第14図 SC2 出土遺物 (S=1/3)

### (5) ピットおよびピット内出土遺物

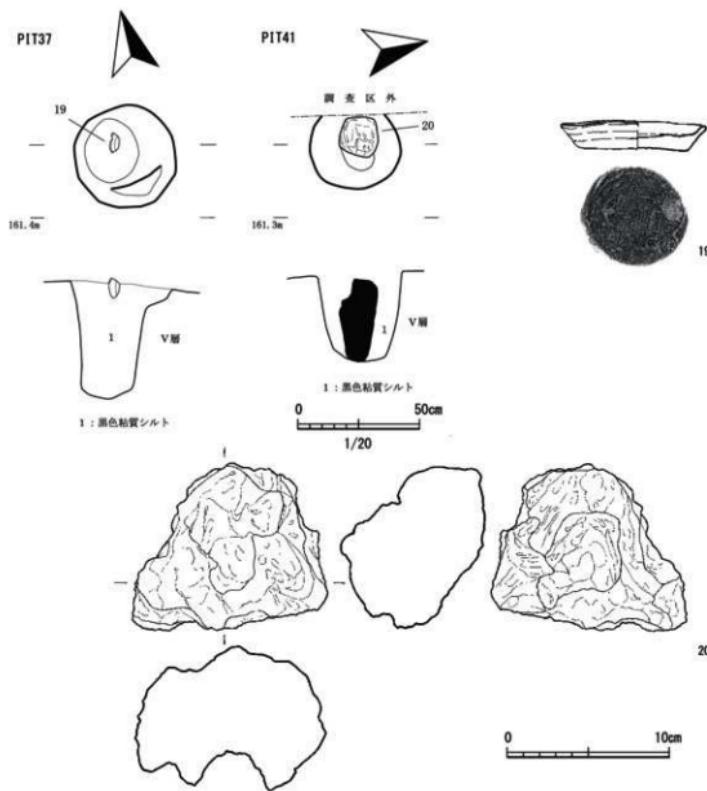
#### PIT37 土師器出土状況 (第15図)

調査区中央よりも北側で検出されたPIT37では、埋土上位から土師器小皿が完形で出土している。ピットは掘立柱建物の柱穴と考えられ、深さは0.5mである。

土師器小皿は埋土中からの出土であり、柱穴が埋没する過程において、何らかの理由で入り込んだものと考えられる。

19は完形の土師器小皿である。口縁部は外方に開き、短くつまみあげられる。口径は8.8cm、底径は6.0cm、器高は1.7cmを測る。底部の切り離しは糸切りである。

胎土はにぶい褐色を呈しており、赤褐色の砂が混じっている。



第15図 ピット内遺物出土状況及び出土遺物 ( $S=1/20 \cdot 1/3$ )

#### PIT41 粘土塊出土状況（第15図）

調査区中央付近で検出されたPIT41からは粘土塊が出土している。ピットは他で検出されているものと同様、掘立柱建物の柱穴と考えられる。上端の直径は約0.4mを測り、深さは検出面から0.3mを測る。

粘土塊（20）は複数個所に凹凸が見られ、柱穴内で柱の固定等に使用されたものと推定される。複数の軽石が非常に多く混じっていることから、混和材として混入させているものと考えられる。出土した粘土塊の重量は505gを量る。

#### 2 中世の遺物

遺物包含層およびピットから出土した遺物を種別毎に掲載しておきたい。

##### （1）陶磁器（第16図）

今回の調査では白磁・青磁の輸入陶磁器のほか、わずかながら備前焼等の国産陶磁器が出土している。

##### 白磁（第16図）

白磁は碗を中心に出土している。これらの分類に際しては、森田勉氏の分類（森田1982）のほか大宰府分類（大宰府市教育委員会2000）、新垣力・瀬戸哲也氏の分類（新垣・瀬戸2005）等を参考とした。

**21** は白磁碗の口縁部である。いわゆる「口禿げ」と呼ばれるものに該当し、口縁端部上面の釉が剥き取られている。大宰府分類IX類に該当し、13世紀中頃から14世紀前半に位置付けられる。**22** も同じく白磁碗の口縁部で口禿げに該当する。**23** は白磁碗の口縁部である。この資料にも口禿げが認められる。大宰府分類IX類に該当するもので、13世紀中頃から14世紀前半に位置付けられる。**24** は白磁碗の口縁部である。

**25** は白磁碗の胴部である。ビット内から出土している。内面には一条の稜線が認められる。これも大宰府分類IX類に該当するものと考えられる。**26** は白磁小皿である。外面には煤が垂れたように付着していることから、灯明皿として使用された可能性がある。内外面ともに施釉が認められる。口径7.9cm、底径4.0cm、器高1.7cmを測る。内面には目跡が残っている。森田分類D群に該当するもので、14世紀後半に位置付けることができる。

#### 青磁（第16図）

青磁は口縁部のほか胴部が出土しているが、口縁部から底部まで揃う完形品は出土していない。これらの内、碗の分類に際しては、上田秀夫氏の分類（上田1982）、大宰府分類（太宰府市教育委員会2000）を参考とした。

**27** は青磁碗の口縁部である。口縁端は短く外反する。大宰府分類の龍泉窯系碗IV類に該当し、14世紀代に位置付けられる。**28** も青磁碗の口縁部である。口縁端は短く外反する。これも龍泉窯系碗IV類に該当しよう。

**29** は青磁皿の口縁部と考えられる。口縁部には屈曲が認められ、端部は短く外反している。内外面ともに施釉が認められる。胎土中には白色、黒色鉱物が含まれる。**30** は青磁碗の口縁部である。外面には鍋運弁文が確認でき、大宰府分類龍泉窯系碗II類もしくはIII類に該当する。時期は13世紀代に収まるものとみられる。**31** は青磁碗の胴部である。内外面ともに施釉されているのが確認できる。胎土には目立つ鉱物は含まれていない。

**32** は青磁碗の底部である。高台が付いており、底径は7.0cmを測る。内面には輪状に無釉部分が認められ、蛇の目釉剥ぎとなっている。高台端部付近まで釉は及んでおり、露胎部分との境界周辺は赤く発色している。胎土中には黒色物質が含まれている。大宰府分類龍泉窯系碗III類もしくはIV類と考えられる。

#### 常滑焼（第16図）

**33** は常滑焼甕の口縁部である。口縁端部は欠落しているものの、その断面形から中野晴久氏の編年（中野1995）の5型式もしくは6a型式に該当するものと考えられ、13世紀第2四半期から第3四半期に位置付けられる。

#### 備前焼（第16図）

**34** は備前焼摺鉢の胴部である。内面には摺目が2単位確認できる。色調は灰色を呈している。胎土には小礫が混じっており、外器面上に露出している。胴部のみの出土であることから、時期については不明である。

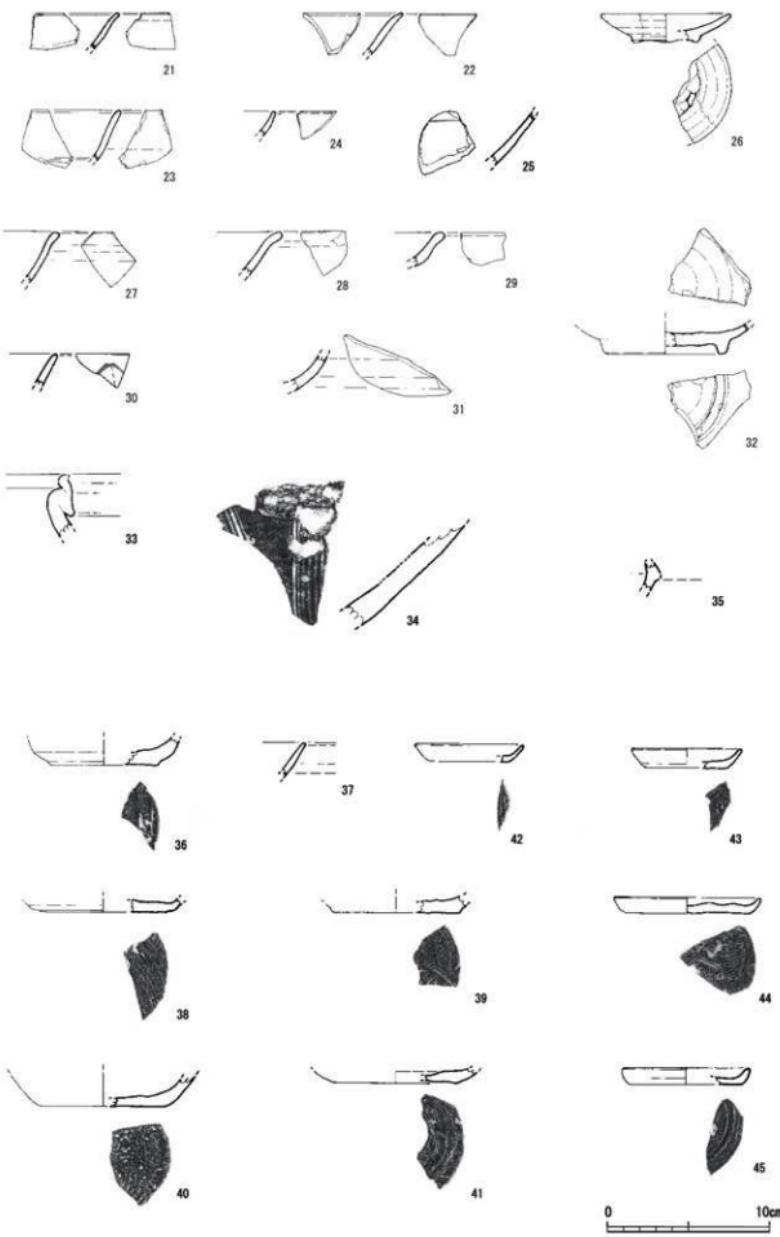
#### （2）須恵器（第16図）

東播系須恵器が1点のみ出土している。**35** は鉢の口縁部と考えられる。片口鉢か捏鉢かは不明である。器面はローリングによって著しく摩滅している。全体の形状は不明であり、時期の比定は困難である。

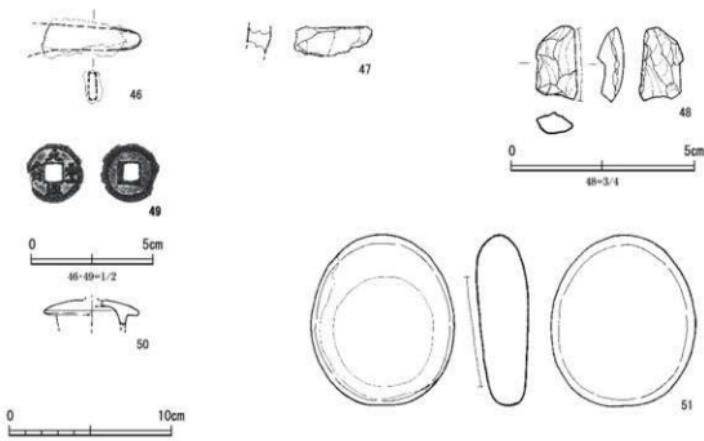
#### （3）土師器（第16図）

包含層およびビットから出土した土師器は壊、小皿である。全て破片資料であり、完形実測できるものは出土していない。これら土師器の胎土は非常に似通っており、色調は概して橙色系の色調を呈している。壊には微細な赤褐色砂が混じっているが、小皿には混和材も少ない精良な胎土が用いられている傾向にある。

**36** は壊底部である。底径は6.8cmを測り、底部から口縁部に向かって上方に立ち上がる器形を呈するものと考えられる。切り離しは糸切りである。**37** は壊口縁部である。外方へと開く器形である。**38** は壊底部である。底径は7.8cmを測る。底部の切り離しは糸切りである。**39** は壊底部である。底径は7.8cmを測る。底部の切り離しは糸切りである。**40** は壊底部である。底部から口縁部が立ち上がる器形となる。底径は7.8cmを測る。全体的にローリングしており、底部の切り離しは不明である。**41** の底径は7.6cmである。



第16図 中世の遺物（陶磁器・須恵器・土師器）(S=1/3)



第17図 中世の遺物（鉄製品・石製品・銭貨）近世の遺物 時期不明の遺物 (S=1/3・1/2・3/4)

#### (4) 鉄製品（第17図）

刀子の柄と思われる鉄製品が1点出土している。46は刃部が破断しており、形状は不明である。全体的に鋒影れが著しいが、断面形状は辛うじて把握できる。

#### (5) 石製品（第17図）

47は滑石製石鍋の胴部片と考えられる破片である。外面にはタテ方向に器面調整の痕が残る。48は火打石と考えられる石製品である。側縁部に使用痕が残っている。微細な剥離が認められ、稜線はつぶれている。石材は黒色のチャートを使用している。火打石の中でも小型のものと考えられ、重量は20 gである。

#### (6) 銭貨（第17図）

49は「元豊通宝」（行書体）である。表土であるI層から出土している。鋳化により部分的に欠失しているが、鉄字は明瞭に読み取ることができる。初鋳年代は1078年とされる。

### 第4節 近世の遺物・時期不明の遺物（第17図）

50は薩摩焼上瓶蓋である。表土であるI層から出土している。形状や釉の特徴から苗代川系と思われる資料である。

51は磨石である。中世のピットの中から出土している。一部被熱しており、黒色化している箇所がみられる。重量は432 gである。磨面は一面にのみ認められ、側縁部には敲打痕が認められる。石材は砂岩を使用している。時期は不明であるが、縄文時代から弥生時代にかけての所産と考えられる。ただし、被熱したのは、中世段階とも考えられ、この時期に何らかの目的で転用された可能性がある。

#### 【引用・参考文献】

上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

永井久美男（編） 1996 「日本出土銭鑄観」 兵庫埋蔵銭調査会

中野晴久 1995 「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

新垣力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14～16世紀の中国産白磁の再整理」『沖縄埋文研究』3 沖縄県立埋蔵文化財センター  
太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡XⅠ—陶磁器分類編—」大宰府市の文化財第49集

第1表 陶磁器観察表

辨認番号	地区名	層	種類	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	基高(cm)	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	分類
4 SHD9'2	上層	青磁	瓶	口	—	—	—	—	—	—	明オリーブグリーン(GGY7/1)	明オリーブグリーン(GGY7/1)	上田I型	
18 SKC2	上層	青磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	明白(2GY8/1)	明白(2GY8/1)	白色、黑色鉢物、移存含む	
21 調査区 II	口組	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明緑白(7GY9/1)	明緑白(7GY9/1)	大室府瓦類	
22 調査区 I	白磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明緑白(7GY9/1)	明緑白(7GY9/1)	大室府瓦類	
23 調査区 I	白磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明緑白(7GY9/1)	明緑白(7GY9/1)	大室府瓦類	
24 調査区 II	白磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明緑白(7GY9/1)	明緑白(7GY9/1)	大室府瓦類	
25 PTT27	中層	白磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	明緑白(7GY9/1)	明緑白(7GY9/1)	微細黒色斑	大室府瓦類
26 調査区 II	白磁	甕	口～底	7.9	4	17	—	—	—	—	白(10Y9/2-2)	白(10Y9/2-2)	粗織	青田D群
27 調査区 II	青磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明白(2GY8/1)	明白(2GY8/1)	大室府瓦類	
28 調査区 II	青磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明白(2GY8/1)	明白(2GY8/1)	大室府瓦類	
29 調査区 I	青磁	浅腹瓶	口	—	—	—	—	—	—	—	明白(10Y7/2)	明白(10Y7/2)	白色、黑色鉢物含む	
30 調査区 I	青磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明緑白(7GY7/1)	明緑白(7GY7/1)	白色、黑色鉢物含む	大室府瓦類
31 調査区 I	青磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明緑白(7GY7/1)	明緑白(7GY7/1)	大室府瓦類	
32 調査区 II	青磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明オリーブグリーン(GGY7/1)	明オリーブグリーン(GGY7/1)	白色、黑色鉢物含む	大室府瓦類
33 PTT22	中層	青磁	甕	口	—	7.0	—	—	—	—	明白(2GY8/1)	明白(2GY8/1)	石灰・乳白色の鉢物	中野I群6.5型式
34 調査区 II	青磁	瓶	口	—	—	—	—	—	—	—	ナチュラル	ナチュラル	4mm以下的小縁を含む	
35 調査区 II	東漢系青磁	瓶	口	—	—	—	—	—	—	—	ナチュラル	ナチュラル	3mm以下的小縁を含む	
36 調査区 I	青磁	甕	口	—	—	—	—	—	—	—	明白(7GY9/1)	明白(7GY9/1)	4.5乳・灰石	

上田=上田1982 森田=森田1982 大室府=太宰府市教育委員会2000 中野=中野1995

第2表 土器器観察表

辨認番号	地区名	層	種類	器種	部位	底部切り離し	口径(cm)	底径(cm)	基高(cm)	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	分類
1 SHD9'3	上層	土器	耳	底	素切引	—	8.0	—	—	ナチュラル	ナチュラル	白(10Y9/2)	白(10Y9/2)	4942	
3 SHD9'1	上層	土器	耳	瓶	不明	—	8.0	—	—	ナチュラル	ナチュラル	浅黄褐(7GY8/3)	浅黄褐(7GY8/3)	4943	
5 SHD9'2	下層	土器	小耳	瓶	不明	—	8.0	—	—	ナチュラル	ナチュラル	浅黄褐(5GY8/3)	浅黄褐(5GY8/3)	4944	
6 SHD9'2	上層	土器	耳	瓶	素切引	—	8.0	—	—	ナチュラル	ナチュラル	浅黄褐(10Y9/2)	浅黄褐(10Y9/2)	1mm以下白色鉢物、砂粒	
7 SHD9'2	下層	土器	小耳	瓶	素切引	—	8.0	—	—	ナチュラル	ナチュラル	白(10Y9/2)	白(10Y9/2)	4945	
8 SHD9'1	下層	土器	小耳	口	素切引	7.8	6.0	17	—	ナチュラル	ナチュラル	浅黄褐(10Y9/4)	浅黄褐(10Y9/4)	4946	
10 SHD9'2	中層	土器	小耳	口	素切引	7.8	6.0	13	—	ナチュラル	ナチュラル	白(10Y9/2)	白(10Y9/2)	4947	
11 SHD9'2	下層	土器	小耳	口	素切引	7.8	6.0	10	—	ナチュラル	ナチュラル	浅黄褐(10Y9/3)	浅黄褐(10Y9/3)	4948	
12 SDI1	上層	土器	耳	瓶	素切引	—	—	—	—	ナチュラル	ナチュラル	白(25Y8/2)	白(25Y8/2)	4949	
19 PTT37	上層	土器	小耳	口	素切引	8.8	6.0	17	—	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/5)	白(7GY8/5)	3mm以下の中形白色	
36 調査区 II	上層	土器	耳	瓶	素切引	—	6.8	—	—	ナチュラル	ナチュラル	浅黄褐(10Y9/4)	浅黄褐(10Y9/4)		
37 PTT24	下層	土器	耳	口	—	—	—	—	—	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/3)	白(7GY8/3)	4950	
38 PTT	土器	耳	瓶	素切引	—	7.8	—	—	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/4)	白(7GY8/4)	4951		
39 調査区 I	土器	耳	瓶	素切引	—	7.8	—	—	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/3)	白(7GY8/3)	3mm以下の中形白色		
40 PTT153	中層	土器	耳	瓶	不明	—	7.8	—	—	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/3)	白(7GY8/3)	2mm以下の中形白色	
41 調査区 II	土器	耳	瓶	素切引	—	7.6	—	—	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/3)	白(7GY8/3)	4952		
42 PTT16	上層	土器	小耳	口	不明	6.5	4.8	10	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/4)	白(7GY8/4)	4953		
43 調査区 II	土器	耳	瓶	口	ハラ切引	6.7	5.1	12	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/2)	白(7GY8/2)	4954		
44 調査区 II	土器	耳	瓶	口	素切引	8.9	7.6	0.9	ナチュラル	ナチュラル	白(7GY8/4)	白(7GY8/4)	4955		
45 PTT16	上層	土器	小耳	口	ハラ切引	7.6	7.0	10	ナチュラル	ナチュラル	白(10Y9/2)	白(10Y9/2)	4956		

第3表 鉄製品 石製品 土製品観察表

辨認番号	地区名	層	種類	器種	部位	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
2 SHD9'4	上層	鐵製品	鉗	—	—	—	—	—	28	
9 SHD7'1	上層	鐵製品	鉗	土半	—	3.0	1.4	—	60	
15 SDH1	上層	鐵製品	鉗	土半	—	1.8	1.0	—	10	
46 調査区 II	土	鐵製品	刀子	柄部	(4.1)	1.1	0.5	—	—	
14 SDH1	上層	石器	石器	裏面	—	2.6	3.6	3.1	410	鋸刃
47 調査区 II	土	石製品	石器	頭	—	2.0	1.1	—	29	チャート(灰色)
48 調査区 II	土	石製品	火打石	—	—	—	—	—	—	
51 PTT21	上層	石器	磨石	磨石	—	19.1	8.8	3.3	4220	研磨
13 SDH1	上層	土製品	土器	—	—	—	—	—	3	
16 SDPDTT	上層	粘土塊	—	—	—	3.2	3.3	1.7	120	
17 SDH	下層	粘土塊	—	—	—	10.1	8.9	6.8	3600	
20 PTT41	上層	粘土塊	—	—	—	10.2	11.9	8.9	5050	

## 第4章 総括

### 第2次調査成果について

今回の発掘調査では、調査区が狭小ながらも、中世の掘立柱建物跡10棟、溝状遺構1条、土坑4基、焼土遺構1基のほか多数の柱穴ピットが検出された。今回の調査区からは中世以外の遺構は検出されておらず、他時代の遺物も出土していない。

では、主体となっているこれら遺構群の時期であるが、掘立柱建物跡は東西方向に主軸を持っているものが多数である。しかし、それ以上に配列を見出せなかった柱穴ピットも多数あることから、これらにはある程度の時期幅が見込まれる。検出された掘立柱建物跡からの出土遺物は多くはなかったものの、出土した貿易陶磁器および土師器の特徴は13～14世紀代に位置付けられる。年代の絞込みは難しいものの、他のピットからも大宰府分類IV類に該当する白磁碗が出土していることから、少なくとも14世紀代に主体のある可能性は高い。

また、検出された掘立柱建物跡は、すべて同一規模ではなく、複数のプランが混在していることが見て取れる。これらは部分的に検出されているものが大半であることから、全形を把握できるものは少ない。しかし、例えばSB2のように庇を持ち、柱穴深度も深い、やや大型と考えられる建物が認められるほかは、梁行が2間の建物が大半となっている。これらの主軸方向が同一であることを考えると、SB2を中心にして、周囲にはそれよりも規模の小さい建物群で構成される配置を読みとることもできる。

他の遺構（溝状遺構や土坑）からもこれらと同時期の資料が出土していることから、掘立柱建物跡と同時期に存在していたことが明らかである。

このほか、包含層からの出土遺物に目を向けると、まず、貿易陶磁器がやまとまって出土している。これらのうち、白磁碗は大宰府分類IV類がやまとまって出土しており、時期は13世紀中頃～14世紀初頭の幅で捉えられる。このほか青磁碗は大宰府分類III～IV類がまとまっていることから、これも13～14世紀代を中心とする。このほか、国産陶磁器は時期を明確に判断できる資料は乏しいものの、出土した常滑焼の口縁部（33）は13世紀代と考えられる。

土師器は破片資料が多く、時期比定が難しいものの、壺、小皿とともに衆烟光博氏の編年（衆烟2004）によつて提示された13～14世紀代の資料と相似していることから、これらもこの時期幅に収まるものと考えられる。

このように、今回の調査で出土した遺物の様相からは、13～14世紀にかけての時期幅が認められ、検出された遺構群の時期は14世紀代が中心となる可能性が高いことが明らかとなった。

### 第1次調査成果について（第18図・第19図）

平成6年に実施した第1次調査では、今回の調査と同程度の面積を調査している。この時の調査でも中世の掘立柱建物跡と考えられる柱穴群、溝状遺構（SD）、井戸状遺構（SE）が検出されている（第18図）。この第1次調査では、南北に走行する幅4m以上の大溝（SD-2）が検出されている。ここからは14世紀代と考えられる備前焼摺鉢（65）などが出土していることから、少なくともこの時期には掘削されていることがわかる。

この大溝の走行方向は南北にあり、これが直線的に延びていたと仮定すると、第2次調査区の東側を走行することになる。とすれば、第2次調査で検出された掘立柱建物跡が東西方向に主軸を持っているものが大半であり、この大溝に直交するような遺構配置となる。

なお、第1次調査では、遺物も多数出土している。これらには遺跡の様相を明らかにする上で指標となるような遺物が含まれており、ピックアップして掲載しておきたい。

調査区からは弥生土器（52～55）が出土しているものの、まとまって出土しているのは中世の遺物である。これらには白磁（56・57・60・61）、青磁（58・59）のほか青白磁瓶（62）、天目碗（63）、東播系須恵器（64）、備前焼（65）、土師器（66～72）等が含まれている（第19図）。これらは概ね13～14世紀代に該当するものが大半であり、今回の調査（第2次調査）出土遺物とかけ離れた時期差は見られない。出土土師器は壺底部に糸切りの切り離しが見られるもの、また、板状压痕を有するものが見られる。これも今回の調査（第2次調査）で出土したものと同じ特徴を示している。これらの時期は概ね13～14世紀代を中心とする。

このほか、ここには掲載していないが、15～16世紀代と考えられる青花小片もごく少量出土していることから、遺跡の下限は少なくともこの時期まで認めることができる。

## まとめ

最後に、第1次調査、祝吉御所跡の確認調査の成果とも併せた祝吉第3遺跡の様相についてまとめておきたい。これまでの調査成果からは、出土遺物は13世紀代から顕著に認められ、中心時期は13世紀中頃以降～14世紀代にあることが分かった。第1次調査区や祝吉御所跡からは15世紀代に下る遺物も散見されることから、この時期までは集落が継続している可能性は指摘できる。

祝吉第3遺跡周辺では、池島遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター2004）や池ノ友遺跡（都城市教育委員会2000）において平安時代後期（11世紀代）と考えられる掘立柱建物跡や周溝墓が検出されていることから、この時期には既にこの地域で集落が形成されていたことがわかる。両遺跡に見られる周溝墓に加えて、池島遺跡からは高麗青磁が出土していることを考えると、この時期に何らかの階層を持つ人物が居住していた可能性は高い。しかしながら、これまでのところ、この地域における12世紀代の様相は不明であり、祝吉第3遺跡においては少なくとも12世紀代に遡る遺構、遺物はほとんど見られず、13世紀以降のものが中心となっている。

このことを踏まえた上で、祝吉第3遺跡周辺の中世集落に触れておくと、調査地點よりも約200m南に位置する天神原遺跡（都城市教育委員会1993）では、12～15世紀までの時期幅を持った遺構、遺物が見つかっている。ここでは、13世紀後半から15世紀前半にかけて遺跡のピークがあることがわかっている。また、西側に位置する平田ノ上遺跡（都城市史編さん委員会（編）2006）では11世紀後半～14世紀代にかけて営まれた集落跡が見つかっているほか、北側の松原地区第Ⅰ・Ⅲ遺跡（都城市教育委員会1989）では、13世紀後半代に営まれた大溝に区画された館跡も見つかっている。今回の調査成果も併せると、当地域周辺では11～15世紀代にかけて複数の集落遺跡が展開していることが明らかとなっている。

さらに、やや離れたところでは、近年、横市川流域の加治屋B遺跡、鶴噴遺跡などで13～14世紀代の集落が見つかっている。ここでは当該期の集落が面的に調査されており、小時期ごとの集落変遷が明らかとなっている（都城市教育委員会2007、2008）。このように、都城盆地における鎌倉時代～室町時代にかけての集落（館）動向は徐々に明らかとなってきているが、これまでの祝吉第3遺跡の調査成果は、まだ断片的なものも多い。今後は周辺における調査事例の増加も待った上で改めて集落の様相を検討する必要がある。

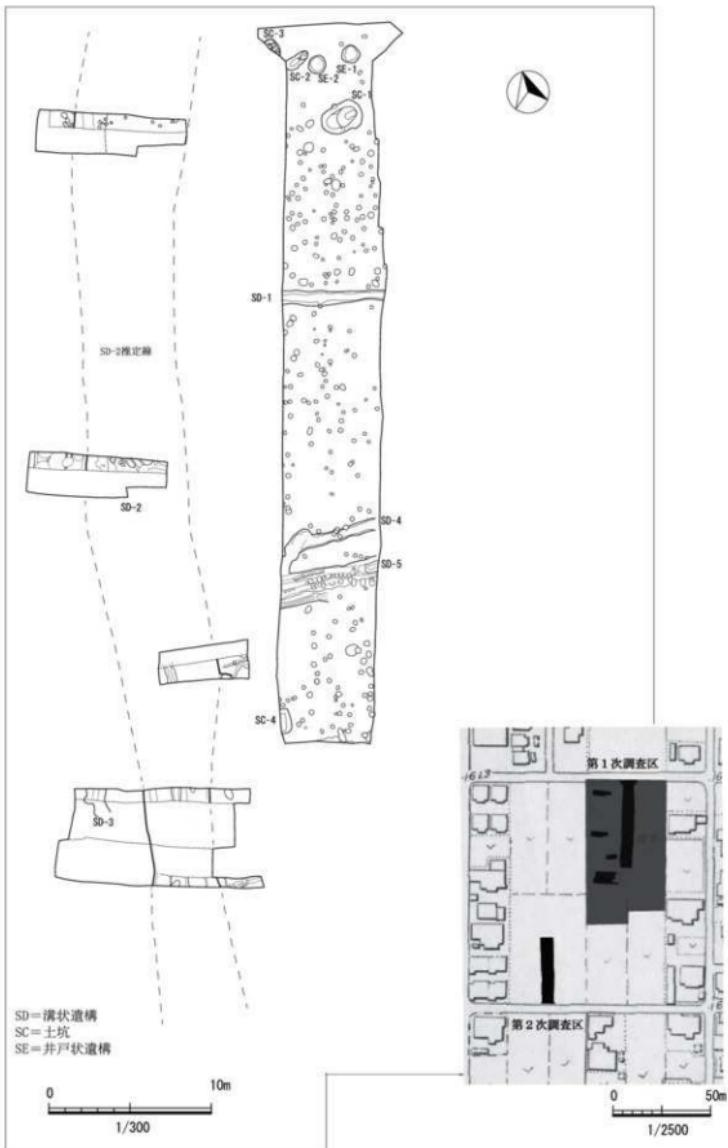
ここで、都城盆地一帯の政治動向について触れておくと、この地域には文治元（1185）年に島津（惟宗）忠久が鎌倉幕府から島津荘の惣地頭職に任じられこの地に下向したとされる。その後、建仁3（1203）年に比企能員の乱に連座し、同職を解かれてからは、北条得宗領となっている。以後、北条氏の支配は続き、建武新政権樹立（建武元年・1334）後には日向国守護畠山直顥による支配となり、その後、延文年間（1356～1360）に島津氏と和睦するまで続いている（都城市史編さん委員会（編）2006）。

これまで見てきたように、祝吉第3遺跡の調査成果からは、島津忠久が島津荘惣地頭職に任じられる12世紀末の遺構は確認されていない。13世紀後半～14世紀代がメインであることを考えると、少なくとも北条得宗領になって以後に集落の隆盛があるものと考えられる。したがって、現状では祝吉御所跡の伝承にあるような島津忠久がこの地に館を構えたとする証拠は乏しい。

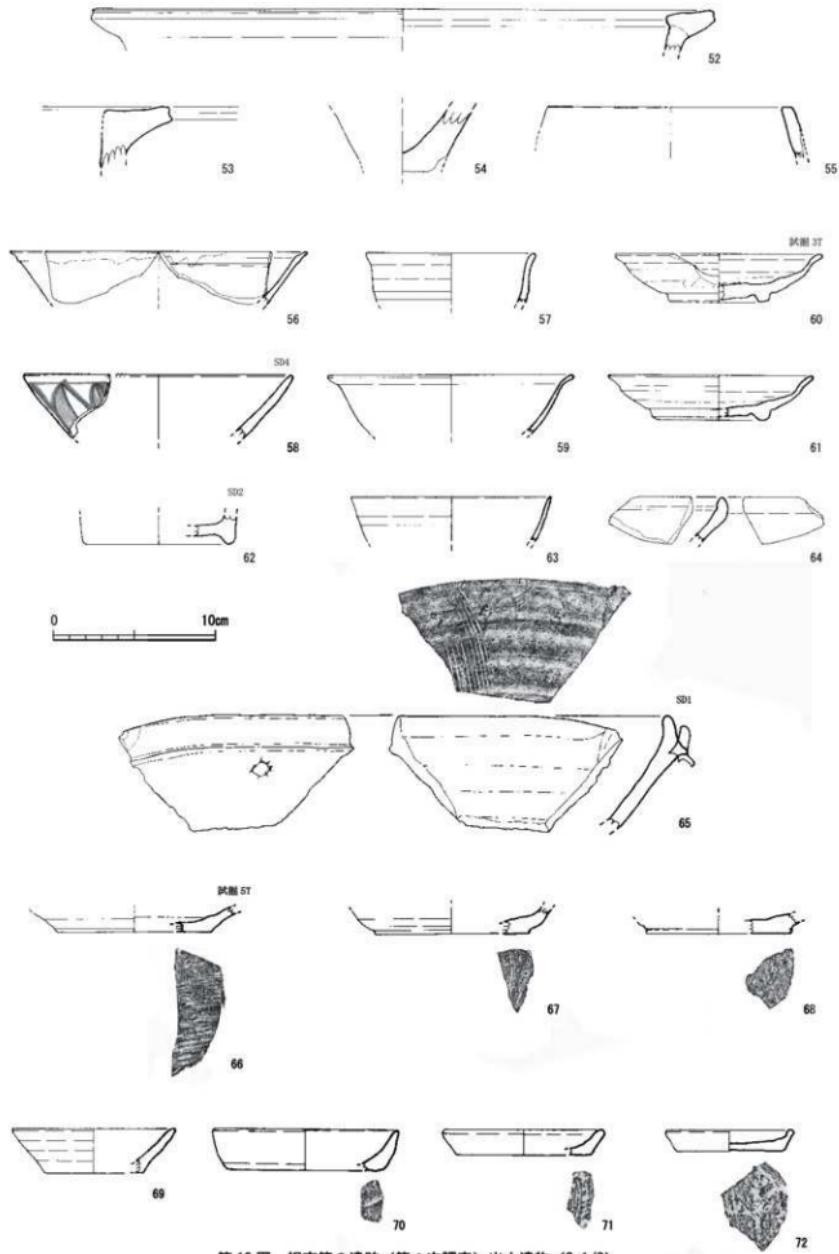
また、先に触れた政治動向には在地の被官や領主等も大きく関わっているとされており、祝吉第3遺跡で明らかとなった成果についても、このような階層の集團と関連づけることができるか検討することも今後の課題といえよう。

## 【引用・参考文献】

- 桑畑光博 2004 「都城盆地における中世土器群の編年に関する基礎的研究（1）」『宮崎考古』19 宮崎考古学会  
間塙忠彦 1991 「備前焼」 考古学ライブラリー 60 ニュー・サイエンス社  
都城市教育委員会 1989 「松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」 都城市文化財調査報告書第10集  
都城市教育委員会 1993 「天神原遺跡」 都城市文化財調査報告書第23集  
都城市教育委員会 2000 「池ノ友遺跡」 都城市文化財調査報告書第49集  
都城市教育委員会 2007 「鶴噴遺跡（中世編）」 都城市文化財調査報告書第79集  
都城市教育委員会 2008 「加治屋B遺跡（平安時代～近世編）」 都城市文化財調査報告書第86集  
都城市史編さん委員会（編）2005 「都城市史」 通史編 中世近世 都城市  
都城市史編さん委員会（編）2006 「都城市史」 資料編考古 都城市  
宮崎県埋蔵文化財センター 2004 「池島遺跡」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第84集



第18図 祝吉第3遺跡（第1次調査）遺構配置図 (S=1/300・1/2500)



第19図 祝吉第3遺跡(第1次調査)出土遺物(S=1/3)



調査区全景 遺構検出状況（北から）



調査区全景 遺構完掘状況（北から）

写真図版 2



SB1 + SB5 (東から)



SB2 (東から)



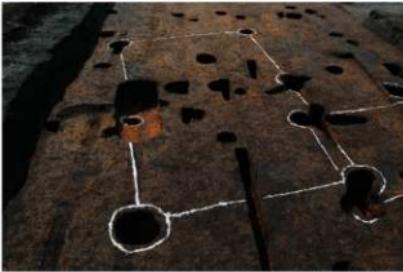
SB3 (東から)



SB4 (西から)



SB10 (西から)



SB6 (北から)



SB7 + SB8 (東から)



SD1 (東から)



SD1 埋め込み部 (東から)



土層堆積状況 (東壁)



SC2 (西から)



SC3 断面 (南から)



PIT37 土師器出土状況 (南から)



SC3 (北から)

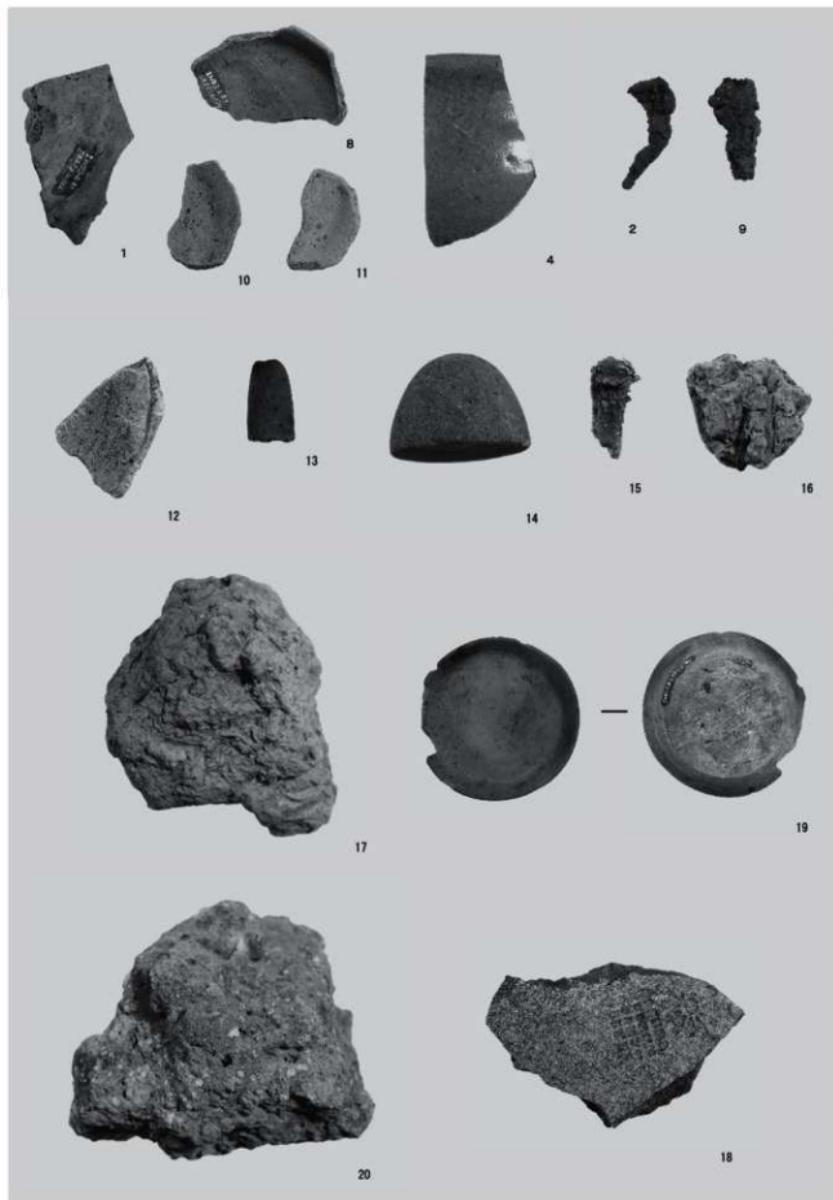


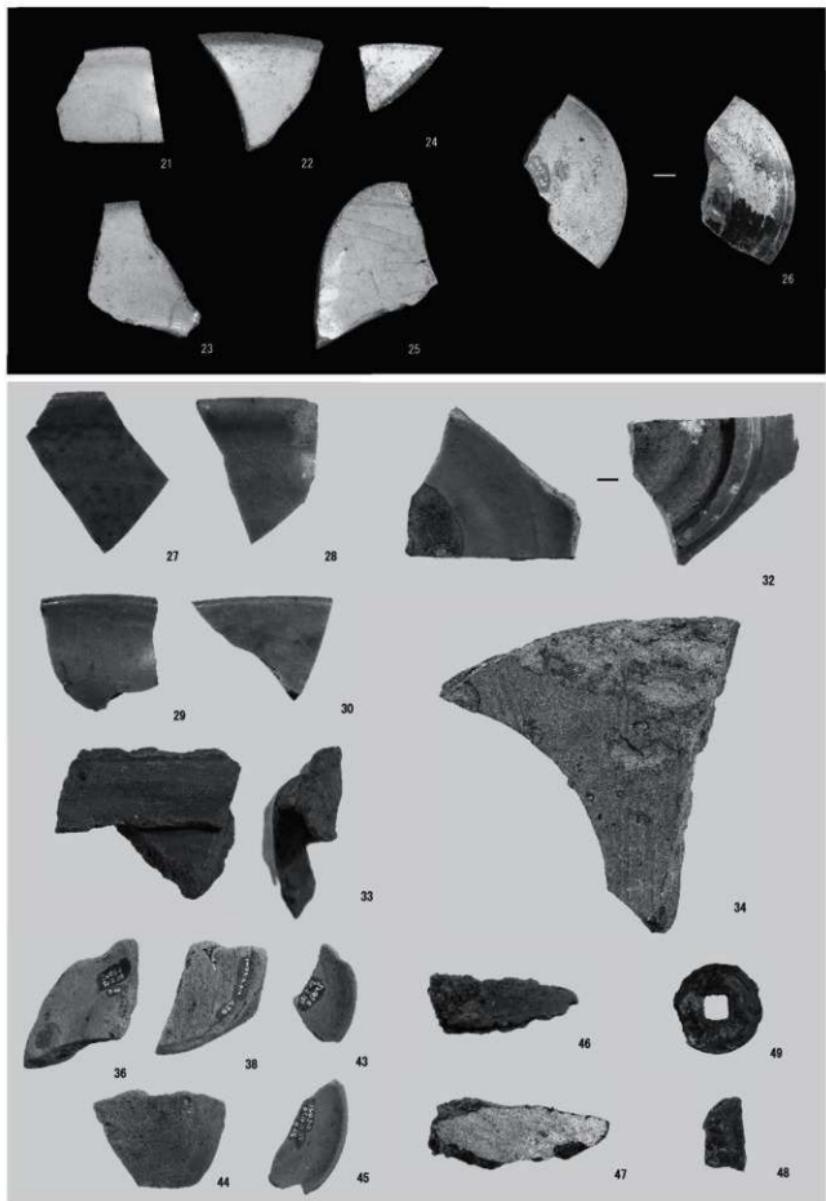
PIT41 粘土塊出土状況 (東から)



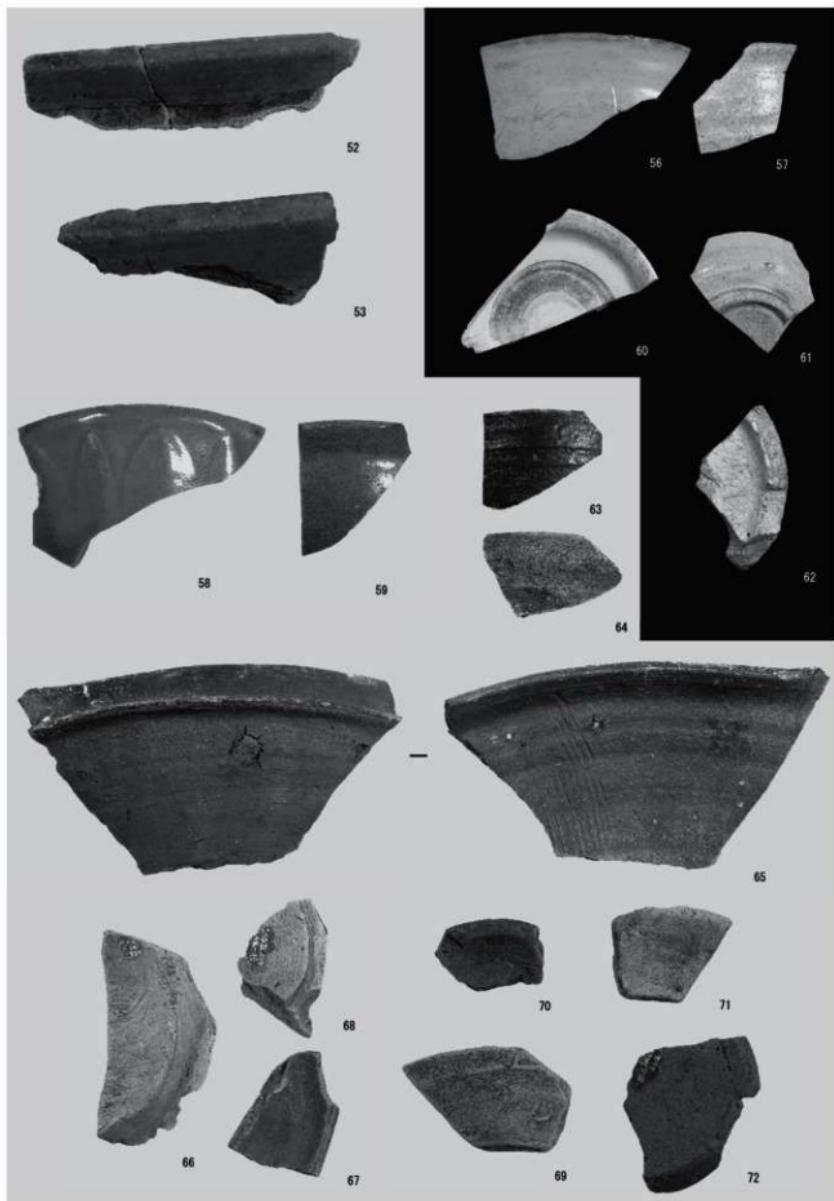
SJ1 (北から)

写真図版 4





写真図版 6



第1次調査出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	いわよしだいさんいせき　だいにじちょうさ							
書名	祝吉第3遺跡（第2次調査）							
副書名	分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第116集							
編著書名	加賀淳一							
編集機関	都城市教育委員会							
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1 TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549							
発行年月日	2015年3月27日							
所取遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査機関	面積	調査原因	
	市町村	遺跡番号						
祝吉第3遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょう 都城市 こくしもとちょう 郡元町 3425番地	45202	M4010	31° 44' 20.1° 付近	131° 05' 58.6° 付近	H25 10.10～ H25 11.11	214m <sup>2</sup>	分譲住宅建設
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
祝吉第3遺跡	集落跡	中世		掘立柱建物跡 溝状遺構 焼土遺構 土坑		陶磁器 土師器 石製品 鉄製品 錢貨		
要約	<p>祝吉第3遺跡は都城市郡元町に所在する。分譲住宅建設に先立ち本発掘調査を実施した。</p> <p>祝吉第3遺跡は一万城扇状地の扇尖部に位置しており、周辺には宮崎県指定史跡祝吉御所跡が所在している。調査区周辺の標高は約160mで推移している。</p> <p>今回の発掘調査は霧島御池軽石層よりも上位を対象として調査を実施した。発掘調査の結果、中世特に13～14世紀代を中心とした遺構・遺物が検出され、当該期の集落遺跡であることが明らかとなった。検出遺構は掘立柱建物跡10棟、溝状遺構1条、土坑4基、焼土遺構1基のはかピットが約150基検出された。遺物は青磁・白磁等の貿易陶磁に加え、国産陶磁もわずかながら出土している。この他に土師器、鉄製品等も出土している。</p>							

都城市文化財調査報告書第116集

## 祝吉第3遺跡(第2次調査)

—分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成27年3月27日

編集 宮崎県都城市教育委員会 文化財課

発行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1  
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549

印刷 株式会社 みやこ印刷

〒885-0093 宮崎県都城市志比田町 5639-3  
TEL (0986) 23-1682 FAX (0986) 22-1682